

1. 略歴

- 1977年3月 東京教育大学附属高等学校卒業
1977年4月 東京大学教養学部文科3類入学
1981年3月 東京大学文学部第一類（美学芸術学専修課程）卒業
1981年4月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専門課程）修士課程入学
1984年3月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専門課程）修士課程修了
1984年4月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専門課程）博士課程進学
1988年9月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専門課程）博士課程単位取得退学
（その間 1987年10月～1988年9月 DAAD（ドイツ学術交流会）奨学生としてハンブルク大学に留学）
1992年10月 東京大学大学院人文科学研究科において博士（文学）取得
1988年10月 神戸大学助教授，文学部（哲学科芸術学専攻課程）
（その間 1990年10月～1991年8月 ハンブルク大学で研究）
1993年10月～ 神戸大学大学院文化学（博士課程）兼任
1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科（美学芸術学専門課程）助教授
2007年4月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専門課程）教授
（その間 2008年10月～2009年9月 ドイツ連邦政府の招聘によりドイツにて研究）

2. 主な研究活動

a 専門分野

美学・芸術学の基本概念の研究、「感性の学」としての美学の歴史的再構成、18世紀から19世紀にかけてのドイツ語圏を中心とする美学理論の研究、20世紀前半におけるドイツと日本の美学交渉史の研究、および間文化的視点からの美学理論の構築

b 研究課題

第一に、2001年に公刊した『芸術の逆説—近代美学の成立』以来の研究の一環として、美学・芸術学の基本概念の研究に従事している。その一端は2009年に公刊した『西洋美学史』（東京大学出版会）において示した。この書物は、学説史研究の持ちうる現代的な意味を問う試みでもあり、この研究をその後も継続して行っている。

第二に、「感性の学」としての美学を歴史的に再構成し、現代の美学を刷新する作業に携わっている。これは数年後に『西洋美学史』第二巻として結実するはずのものである。

第三に、昨今の「間文化性」への関心の増大に応じつつ、19世紀末から20世紀前半における日本の西洋美学の受容を「間文化性」の問題として扱う可能性を探る作業を継続している。

c 主要業績

(1) 論文

小田部胤久、「レーヴィットと日本—文化の複層性をめぐる一考察—」、稲賀繁美編『東洋意識—夢想と現実のあいだ』、ミネルヴァ書房、75-100頁、2012

小田部胤久、「ライブニッツからの感性論＝美学—微小表象論の射程—」、第62回美学会全国大会「たそがれフォーラム@仙台」発表報告集、2012

Tanehisa Otabe, 'Genius as a Chiasm of the Conscious and Unconscious: A History of Ideas Concerning Kantian Aesthetics', Piero Giordanetti, Riccardo Pozzo, Marco Sgarbi (Eds.), "Kant's Philosophy of the Unconscious", Berlin, De Gruyter, 89-101頁, 2012

Tanehisa Otabe, „Die Kunst des alten Japan im „Weltstrom“. Zur Kulturphilosophie des frühen Tetsuro Watsuji“, Claudia Bickmann (Hg.), „Sinnhorizonte. Weltphilosophien zur Bildbarkeit des Menschen“, 175-190頁, 2012

Tanehisa Otabe, „Der „Grund der Seele“. Über Entstehung und Verlauf eines ästhetischen Diskurses im 18. Jahrhundert“, Proceedings des XXII. Deutschen Kongresses für Philosophie „Welt der Gründe“, Hamburg, Felix Meiner, 763-774頁, 2012

Tanehisa Otabe, „Drei Stufen der Globalisierung im Hinblick auf das Verhältnis zwischen Europa und Japan. Ein Beitrag zur interkulturellen Ästhetik“, Wolf Dietrich Schmied-Kowarzik, Helmut Schneider (Hg.), Zwischen den Kulturen, Im Gedenken an Heinz Paetzold, Kassel University Press, 30-43頁, 2012

- 小田部胤久、「ライブニッツからバウムガルテンへ——美的=感性的人間の誕生」、神崎繁・熊野純彦・鈴木泉編『西洋哲学史IV』、講談社、113-164頁、2012.4
- 小田部胤久、「「無意識」をめぐるヘーゲルとロマン主義——美学（史）の立場から——」、『ヘーゲル哲学研究』、18、46-57頁、2012.12
- 小田部胤久、「美学の生成と無意識——三つの系譜に即して——」、『思想』、2013年4月号、81-96頁、2013
- Otobe, Tanehisa, „Platon und die aesthetische Wende der Aesthetik“, *JTLA*, 37, 2012 頁、2013.3
- 小田部胤久、「肉の軟らかい人々は思考の点で素質に恵まれている——アリストテレスの感性論に寄せて」、『美学芸術学研究』、31、2013.3
- Otobe, Tanehisa, 'Japanese Aesthetics seen from an Inter-Cultural Perspective', "Diversities in Aesthetics: Selected Papers of the 18th Congress of International Aesthetics", 417-428 頁、2013.7

(2) 書評

- 佐藤徹郎・雨宮民雄・佐々木能章・黒崎政男・森一郎、『形而上学の可能性を求めて 山本信の哲学』、『週刊読書人』、2012年12月14日号、4頁、2012.12
- Agnus Nicholls and martin Liebscher (Eds.), 『Thinking the Unconscious. Nineteenth-Century German Thought』、『日本18世紀学会年報』28、2013
- Daniel Heller-Roazen, 『The Inner Touch. Archaeology of a Sensation』、『日本18世紀学会年報』28、2013.6

(3) 学会発表

- 国内、小田部胤久、「ミメーシスとパラダイグマ——美学的一考察——」、日本フランス語フランス文学会2012年度春季大会、東京大学、2012.6.3
- 国際、Tanehisa Otobe、「On an Aesthetic Consciousness of our Being: Toward a Contextualization of Shusterman's Somaesthetics」、International Congress of Aesthetics、ポーランド、クラクフ、2013.7.24

(4) 会議主催(チェア他)

- 国内、「日本シェリング協会」、チェア、「想像力=構想力」、2013.7.6~2013

(5) 研究テーマ

- 文部科学省科学研究費補助金、小田部胤久、研究代表者、「感性の理論史——美学（史）の再構築のために」、2012~

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- 特別講演、日本大学、「感性論としての美学から見た『判断力批判』」、2013.11

(2) 学会

- 国際、国際シェリング協会、委員、2012.4~
- 国内、日本シェリング協会、理事、2012.4~
- 国内、日本18世紀学会、幹事、2012.4~
- 国際、国際18世紀学会、委員、2012.4~
- 国際、Culture and Dialogue、編集委員、2012.4~
- 国際、Allgemeine Zeitschrift fuer Philosophie、編集委員、2012.4~
- 国内、美学会、会長、2013.10~